

ほない歴史通信

第84号
2017.9.1

大子の古文書は今

藤井達也

『大子町史』は大子の歴史を手軽に知ることができる本として、これまで多くの方に親しまれてきました。『大子町史』編纂を通じて明らかになった地域の古文書について考えてみたいと思います。

自治体史編纂事業では、編纂委員会が立ち上がった後、その自治体に関連する史資料を集めることから始まります。これまで知られていた古文書や発掘調査等の成果を集約するのはもちろんのこと、関連地域を訪れ、現地の方への聞き取り等によって、関連する地域の情報を網羅的に収集します。とりわけ、個人宅や神社、各地区で保管されてきた古文書の調査を通じて、地域の古文書が「発見」（再発見）され、活用されるようになります。自治体史編纂の大きな意義は地域の古文書の把握にあるのです。

昭和四十七年（一九七二）に始まった『大子町史』編纂事業でも、多くの地域の古文書が「発見」され、その一部が『大子町史』資料編 上・下巻で紹介されました。その量も膨大で、上巻（二〇〇ページ）、下巻（一三四九ページ）合わせて二三五〇ページにも及びます。調査の過程で作成された古文書の目録や写真は、大子町史編さん委員会解散後も町の教育委員会が大切に保管してきました。

しかし、『大子町史』編纂を終えて二〇年以上過ぎた今、当時調

査された古文書はどうなっているのでしょうか。

古文書は、家の建て替え、所蔵者の代替わり、転居等のちよつとしたきっかけで行方不明となり、最悪の場合失われてしまします。三重県では、昭和五〇年代からの三〇年間に民間にある古文書の内一七パーセント以上が廃棄または所在不明になったとの報告もあります。果たして、『大子町史』編纂終了から二〇年以上経過した今、どれだけ古文書が変わらず残っているのでしょうか。残念ながら、すでに失われてしまった古文書もあると聞きます。

古文書を守るカギは、情報の共有です。
もしご自宅や地区の集会所にこれまで伝えられてきた古文書（明治時代以降の文書も貴重な古文書です）があるのでしたら、一度どこに保管されているのか確認してみてください。家族や地域内で古文書の保管場所の情報を共有することが、古文書紛失の機会を減らすことにつながります。

また、どうしても古文書の保管が難しい場合でも、必ず町の教育委員会や郷土史に詳しい方など誰かに相談してみるようにしてください。適切な保管場所を紹介してくれるなど相談にのつてもらうことができます。

古文書は地域の歴史の証言者であり、地域のことを深く知りたいたい時に対話をする相手でもあります。古文書が失われてしまうことは、地域の「語り部」を失うことと同じなのです。古文書を守る意味を理解した上で、地域で大切に保管し、継承していくことが求められるでしょう。

しかし、「語り部」の声は聞き慣れない人には少し難しいところもあります。その声をわかりやすく伝える場の一つが、大子町史編さん委員会からつながる「ほない歴史通信」です。今後も、本誌を通じて、古文書たちの語る声を皆さんに届け、ともに地域の古文書を守っていききたいと思えます。
（水戸市立博物館）

大子町小中学校校歌の成立と 学校所在地の地域環境（上）

阿久津 久

明治政府は、明治五年（一八七二）八月、外国の制度を模した「学制」を發布し、近代学校を全国各地に設置し、我が国の近代教育を発足させた。翌九月には、「小学教則」を公布し、小学校における教科課程及び教授方法の基本方針を明らかにした。

大子町では、明治五年に佐原小学校、西金小学校、翌六年には、大子小学校、浅川小学校、矢田小学校、下野宮小学校、依上小学校、袋田小学校、黒沢小学校、初原小学校、上小川小学校、大沢小学校、小生瀬小学校、七年には池田小学校、楨野地小学校、十二年には上岡小学校、上野宮小学校、二十七年には内大野小学校が設置されている。

現在、大子町に残る最も古い校歌は、明治四十一年四月に制定した黒沢小学校のもので、作詞を佐々木信綱、作曲を田村虎蔵が担当している。同じ作詞・作曲者の校歌が旧上野宮小学校にもあった。

校歌が全国的に定められたのは、昭和十六年三月一日、文部省令の勅令をもって「国民学校令」が、そして三月十四日、文部省令第四号で「国民学校令施行規則」が制定されたときである。字名を国民学校名とし、校歌が作られた。制定の主旨は、「近来是等諸学校ニ於テ校歌、朝礼歌、開校記念日ノ歌、学校行進曲等」を作成する学校は少なくないが、「是等ノ歌詞、楽曲モ亦音楽教材ノ一部ト看做サルルノミナラス殊ニ校歌、朝礼歌ノ如キハ訓育上極めて重要」であることから今回認可規定を設けて「内容ノ適正ヲ期シ」他学科教材トノ有機的連絡ヲ図リ以テ教育上遺漏ノナイヨウ」にしたいというのである。

この時期の作詞・作曲者は、文部省が指定して、全国の小学校

に紹介した。著名な国文学者や作曲家が選定され、各地を担当させたようで、選ばれた人たちは、学校をたずね、地元の古老から話を聞いて作詞したために、現在存在しない地名が使われているのが特徴である。

「校歌」は心の原風景ともいわれ、懐かしむ人達が多い。しかし戦前は、その歌詞・楽譜に「徳育的要素」、「忠君愛国」の精神が求められ、国家の教育方針が色濃く反映されている。そして、それを祝祭日儀式や学校行事等において全校で合唱するなど、集団生活において統制心を養うための最高の教育方法であった。まさに「校歌」は、当時の国家の「国民教化策」の一つとして重要視された道徳教育の教材の一つとして利用されたのである。

しかし、大子町視聴覚ライブラリー運営委員会が作成した「大子町小中学校ビデオ集」の序文に、当時の大子町教育委員会教育長黒田仁一氏は、「三年前でした、ある校庭の樹木の下で休んでおられた老夫婦が涙を流しながら口ずさんでおられるところに出会いました。それは幼き頃の思い出を校歌とともに回想しているところでした。その老夫婦から『私たちにとつて校歌は心の故郷であり、励ましの言葉なのです。』ということを聞いたと記している。国家統制下において、「国民教化策」の一環であった校歌であっても、幼い時に受けたものは生涯忘れず、心のよりどころとしていることが読み取れる。

少子化による統廃合の結果、大子町の小学校は現在七校、中学校は四校である。そのなかで黒沢小学校だけが、明治時代に作られた校歌を残しているが、そのほかの校歌は、ほとんどが戦後に作られたもので、とくに中学校については、昭和二十二年四月の新制中学校発足に伴って作られたものが多い。

（大子町文化財保護審議会委員長）

歴史を物語るもの 道標

綿引逸雄

道標とは街道等の路傍や道の辻・分岐点などに建てられ、道行く旅人に行き先や道のりを知らせる交通標識である。近世以降、石に刻まれ建てられたものの多くが、現在も残っている。地図やナビゲーションシステムが普及した現在、道路を走っていて青地に白文字の行き先表示板を良く見かけるが、このような道路標識も道標と言えよう。先人にとっても現代人にとっても、初めての土地での旅、未だ見ぬ土地への旅は不安感が付きものである。ここに道標や案内表示板があれば、安心感は一層増すであろう。道標はその場所を初めて通過する者にとって重要な存在であった。

現在、日立市内および隣接市村にある日立市に關係ある道標を調査している。日立市では、一九八〇年代に「ひたち野仏の会」によって石仏石塔の悉皆調査が行われた。以来三〇年ほど経過した今回の調査では、道標に関しては新しく確認された道標が存在する一方、行方不明になった道標が複数存在していることが判明した。そこで、道標一基ごとに、写真と拓本で記録を残し、調査レポートを日立市郷土博物館のホームページで公開する作業を進めている。

日立市内には七〇基ほどの道標が確認されている。日立市最古の道標は元禄十六年（一七〇三）の大原道標で、最も新しい道標は昭和初期の建立である。古いものは地元産の変成花崗岩（小木津石）の自然石などが石材として使われ、以下、江戸時代中後期から明治時代にかけては蛇紋岩（町屋石）の切石が多く使われ、幕末から昭和時代には石灰岩（大理石）も使われるようになった。さらに昭和時代にはコンクリート製のものまであることがわかり、建立年が刻まれていなくても石材からおおよその時代を推定できる。また、同じ日立市内でも地域により、使われる石材に違いが

見られ、基本的には近い場所で産する石材を使っていることがわかった。また、道標には道案内を主な目的とした専用道標と道案内を従とした併用道標があり、石に刻まれた行き先は信仰に關係するもの（御岩山・堅破山など）の他、生活に關係したと思える集落を示すものなどに分類可能なことがわかった。

八溝山塊と久慈山塊に挟まれ、久慈川とその支流沿いに開けた町である大子には、南北には陸奥と常陸を結ぶ道が、また東西には海岸部側からの道と下野側からの道とがある。つまり、四方からの文化が交わり、新たな文化を生んだ地とも言える。そこには現在約一万八千人の人が住んでいるが、道標が建てられ始めた近世には南郷街道が南北に通っていた。この街道は棚倉街道よりも険しいため、藩では脇往還として位置付けていたようであるが、人や物資の交流は盛んであった。とくに、八溝山には坂東三十三観音霊場第二十一番札所の日輪寺が、袋田には「本国中最第一の景勝たり」とも言われた袋田の滝があることから、訪れる人も多かったようである。そのため、現在も町域に多くの道標が残されている。大子郷土史の会の方々が平成元年から八年をかけて調査した報告書『大子の石仏』によると、約六〇基の道標が確認されている。大別すると、道案内を主目的とした道標、道祖神關係道標、馬頭觀世音關係道標、庚申塔・二十三夜塔關係道標等があり、道案内を主な目的として建てた道標の多さが山々に囲まれた大子町の特徴を物語っている。

大子町でも全道標を拓本に採り地域の歴史を物語る史料として残したり、説明表示板等の充実を図るなどして保存活用し力を入れる一方、次世代を担う子ども達が学ぶ「大子学」の教材にするのも有意義なことと思われる。また、道標を訪ね歩いて先人の想いに触れる活動は地域活性化の一助になるかとも考える。

私も春秋の穏やかな一日を、道標を訪ね歩いてみたいと願っている。

（日立市郷土博物館）

ミヤマスカシユリ増殖大作戦

出村尚英

昨年七月、秩父の武甲山で、三七年ぶりに自生するミヤマスカシユリが確認されたというニュースがあった。「ほない歴史通信」第八三号の野内秀伸先生の記事にあるように、昭和十七年に武甲山で発見されたユリである。しかし、セメント会社の許可がないと入れない管理区域内にあるので、武甲山で一般の人が自生するミヤマスカシユリを見ることは不可能だ。一方、袋田の滝付近のミヤマスカシユリは昭和四十年に発見されたが、第一観瀑台付近の岩壁では、オレンジ色の可憐なミヤマスカシユリを間近に見ることが出来る。また、袋田の滝の横に屹立する断崖絶壁の屏風岩の上部のオーバーハングしたあたりにもミヤマスカシユリは自生している。その他、大子町では、男体山から南へ続く岩壁のあちこちにも自生しているのが見られる。しかし、個体数は限られ、絶滅の危機にある植物となってしまうている。

希少植物の場合、動物の食害なども個体数減少の大きな要因となるが、容易に動物が近づけない岩壁に自生するミヤマスカシユリを絶滅の危機に追い込んだのは、人による盗掘である。かつて岩場にたくさん自生していたウチヨウランも、袋田の滝や生瀬富士ではほとんど見られなくなってしまった。ユリは生命力の強い植物である。たとえば、ヤマユリはイノシシに喰い荒らされても、球根の断片から再生し、数年後には再び花を咲かせる。絶滅危惧種のミヤマスカシユリだが、実は増殖は容易である。その方法をいくつか紹介してみよう。

①種を発芽させて育てる

ヤマユリやスカシユリは、ふた冬を経験して発芽する。秋に種を蒔けば、一年半後の春には発芽するのである。最初の年は、葉が一枚つくだけだが、それを、鉢に植え替え一年育てると、数枚

の葉が出てくる。その翌年以降には、株立ちするものも現れる。条件が良ければその翌年に一つだけ花を咲かせる。種を蒔いてから五〜六年で花を見ることが可能だ。年数はかかるが、実からたぐさんの種が採集できるので、たぐさんの株を作ることが出来る。

②木子（子球）を育てる

岩壁のミヤマスカシユリは、岩松と共生して生育している場合が多い。株の中には、白い小さな玉状の木子ができる。それを取り出し、鉢などに植えたり、庭の石組みの中に埋め込んでおけば、二〜三年で花をつける株に育成することができる。木子が手に入れば、比較的早く容易に花を咲かせることができる方法だ。

③鱗片増殖法

ミヤマスカシユリの球根が手に入れば、鱗片に分けて増やすことが可能だ。球根をバラバラにした鱗片をダクニールなどの殺菌剤で消毒し、晩秋の頃、土に挿しておく。翌年、鱗片の先端から葉が一枚出てくる。頭が隠れる程度であまり深くかけない方が発芽しやすい。そのまま秋まで育てれば、秋には子球ができる。それを鉢などに植え替えて育てれば、株立ちまでの期間をかなり短縮することができる。一つの球根から三〇個ほどの鱗片が確保できるので、一気にたぐさんの株が作れる。

私は、平成二十四年の秋からこれらの方法でミヤマスカシユリの増殖に取り組み、五年目の今年は、花を咲かせる株を二十数株に増やすことができた。来年は、それらが複数の花を咲かせる株になるので、長期間にわたって花を觀賞できるように思う。バックヤードでは、その後に育成した小さな株が順番を待っている。人間が絶滅に追い込んでしまった希少植物ミヤマスカシユリ、人間の力で増やしていかなければならない、と思う。そして、奥久慈の岩壁にたぐさんのミヤマスカシユリがオレンジ色の花を揺らす眺めをもう一度取り戻したいと願っている。（大子町在住）

大子町・鎮守の杜（七）

十二所神社（大子町大子後山四五八）

高根信和

水郡線常陸大子駅前ロータリーを左折し、本町T字路交差点を右折すると、鳥居と石段が見えてくる。駅から約五百メートルほど、徒歩二、三分の距離である。急な参道の石段は通称百段階と呼ばれており、毎年三月のひな祭りには石段の両側に緋毛氈が敷かれ、そこに約千体ほどのひな人形が並ぶ。この雅やかな演出は、多くの観光客の目を楽しませてくれる。

石段を登ると平坦な所に出る。左手はかつての県立大子第二高等学校の敷地であったが、現在はいよいよ小学校体育館と大子幼稚園が建っている。また右手は、だいが小学校である。この地は、幕末水戸藩が設立した郷校一五校の一つ、大子郷校文武館が安政三年（一八五六）に建てられたところで、現在は文武館文庫と大ケヤキが当時の姿のまま残っている。

百段階に続く長い参道を町道が横切る。さらに石段を登り、狛犬、鳥居を過ぎると、三峰山登拝記念の石灯籠、左手に手水舎がある。石段を登りつめると、大正七年に京都川添良太郎が奉納した一对の狛犬とともに拝殿に行きつく。

拝殿は入母屋造で銅版葺き、間口四間、奥行三間。本殿は流造木羽葺き、間口一・五間、奥行三間。本殿は、拝殿から幣殿を経て急な屋根付きの施設で連なっている。祭神として、国常立尊（くにとこたちのみこと）外一六神の神々を祀る。町内には、上岡、内大野、下金沢にも同名の神社が鎮座している。

社伝によると、当地方の開発の守護神として神龜四年（七二七）に創建され、慶長年間（一五九六〜一六一五）に佐竹義宣が社殿を改築している。元禄二年（一六八九）徳川光圀の保護を受け、明治六年（一八七三）に村社に列格した。明治四十三年（一九一〇）本町の



十二所神社拝殿

火災により社殿を消失し、後に小学校敷地の一部に鎮座後、現在地に造営された。後山の地名のとおり、市街地を見下ろす山裾に造営され、南東方向には遠く男体山が眺望できる。神の宿る所にふさわしく、五穀の豊かな稔りを願い、延命長寿、無病息災の神として多くの参詣を集めている。

境内から左手の小径を登り、神庫の前を過ぎると、昭和二十八年に奉納された赤色の鳥居とともに中島藤右衛門を祀る蒟蒻神社が建っている。コンニャクの栽培関係者によって建立されたもので、毎年四月上旬には春季例大祭が催されている。（水戸市在住）



蒟蒻神社

依上地区、ある農業青年の挑戦物語（下の二）

―特産品・りんごのルーツを探る（六）―

本誌第八二号で述べた「袋田フルーツパーク」について若干補足しておきたい。昭和四十五年八月に開園した同施設は、一時は県内外から幅広く集客し、木澤源一郎さんによると、「ほとんバス」が立ち寄ることもあって大変な賑わいを呈したと言うが、その賑わいも二年ほどの短期間で終わった。永続的な販売拠点としての期待は結局裏切られてしまうのだが、しかしそれは一面であって、木澤さんはこうも語る。「フルーツパークにはものすごく人が来たから宣伝にはなった。宣伝になって、今考えるとプラスだったね」と。大子産りんごの知名度の低さからくる悲哀を人一倍味わった木澤さんだけに、この宣伝効果はありがたかったようである。

収穫したりんごを売る場合、販路のいかんを問わず運搬手段が不可欠である。木澤さんの場合は、昭和四十三年八月にブルーバードの五百キロ積みライトバンを入手していて、これが販売に役立った。多くのりんご農家は、時と場所の違いこそあれ小売りに歩かざるを得なくなるのだが、木澤さんも同様である。「地元で売るのは恥ずかしい」と感じたため、ライトバンに袋詰め（一袋七、八個入り）のりんごを積み、販路を求めて水戸市、日立市、勝田市（現ひたちなか市）等の団地や社宅を何度も訪れることになる。だが、大子のりんごと言っても誰も信用してくれない頃のこと、未知の場所での、未知の人たちへの小売りは難渋した。

小売りの一場面を紹介しよう。りんご仲間の中野茂さんと共に勝田市にある国鉄の職員住宅を訪ねた時のことである。ドアを「トントンやって二、三人に声を掛けたら話に乗ってくれて、試食して味見したらおいしいねということになり、お付き合いに買うかなど一人が買ったら、じゃあ私も私もと買ってくれた。初めて売

れてうれしかったんですよ。ところが、向こうからやってきた若い女性が、みんな騙されてるよなんて言って、大子のりんごなんて嘘だよと。自分は大子の出身で分かってるんだから嘘だよと。恐らく青森の方の屑りんごを持ってきて売ってるんだから、みんな騙されてんだよと言われちゃって。私ら大子の農家で、私らがつくったりんごをこっちに売りに来てんだと言っても信用してくれない」。結局、お客の一人がそれじゃあ返すと言いついたら「私も私もと、みんな返されちゃったんです。いやあ、悔しかったけどどうしようもねえんです。悔しくて、涙が出るようだった」、と言う。売れ残ったりんごは持ち帰り、牛のエサにするしかなかった。

水戸市の若宮団地を訪ねたこともあった。「大子でりんごを生産している者なんです、小売りに歩いているのでいかがですかって試食してもらおうとするんですが、試食どころじゃねえ。当時の団地は鉄のガツチリしたドアで、中にチェーンがあつて少ししか開けてくれない。間に合ってますと、バチンとドアを閉めて聞いてくれない。いやあ、何軒歩つても話を聞いてくんねえと行くのもやんなっちゃって。売れないで苦労したんですよ。本当にね、辛かった」。味には自信があつても思うように売れない辛さ、追い詰められて、一時は挫折しそうになり転職も考えたようだが、それを乗り越えられたのは仲間と毎年行った先進地視察であった。「産地へ行くといろいろ元気づけられたんですよ」。

木澤さんは諦めなかった。「二回目の時は誰も見向きもしない。二回目は、この間来てくれたんだねと声ぐらい掛けてくれる。三回目になると、何回も来てくれたからお付き合いしましょうと。それで話もできる、味見もしてくる。一回じゃだめなんだ」との助言を胸に、何回も何回も往復する。「何年かかかりました。三年ぐらいで売れ行きが変わったんですよ。売れるようになった、待っててくれるようになった。昭和四十五、六年頃からですな」。苦労が、ようやく実を結び始めたのである。

（齋藤典生）

『大子町史』と活版印刷の魅力

『大子町史』資料編及び通史編の紙面を指で軽く摩ってみると、一文字一文字の手ざわりが感じられる。紙質も特漉きの上質紙で、その感触がとても心地いい。長時間読んでいても、少しも疲れなない。実はこれらは、活版印刷特有のものである。活版印刷は、鉛を主体とした金属活字を組んで版を作り、それを印刷するため、紙面に微妙な凹凸ができる。それが前述のような味わいを醸し出すのである。そして、その印刷、製本を担当したのが東京に本社のある株式会社精興社である。

「精興社は、大正二年（一九一三）に白井赫太郎によって東京活版所として創業したのが始まりで、大正十四年に社名を精興社と変更した。精興社の活版印刷の活字は、創業者の白井と天才的な字彫り職人とうたわれた君塚樹石の二人が、共同で造り上げた独自の印刷書体『精興社書体』を母型として鑄造されたものである。この独特の文字は読みやすく、美しさと力強さを備えた活字とされ、明快な印刷書体と精緻な文字組は内容にふさわしい書物を作り出す。こうした精興社の造本技術は、学者や文筆家の間で『一度で良いから印刷を精興社に頼みたいと願う』と言われるほど、高い評価と信頼を得てきた」（平成十四年十月二十五日付日本経済新聞）という。昭和七年（一九三二）には『岩波文庫』を、また翌八年には『岩波全書』を初受注、以後筑摩書房の『現代日本文学全集』、岩波書店の『日本古典文学体系』、『漱石全集』等々、数多くの著名な書籍群を世に送り出してきた。

一方で精興社は、昭和四十年代から地方自治体が発行する地方史の印刷、製本も請け負い、茨城県内では県史をはじめ多くの市町村史の刊行を受注している。

『大子町史』も縁あって、精興社で印刷、製本することができ

たのである。まず、完成した原稿に順次写真や図表を付けて入稿する。しばらくすると、初校のゲラ刷りが出て来る。精興社では、ゲラ刷りは普通りに紙縫りで綴じている。柔らかい紙縫りは紙が破れてバラバラになる心配がないからだという。これを赤字で校正して返送する。初校の校正は、誤字、脱字だけでなく、執筆者がしばしば加筆、訂正を行うため、赤字が大幅に増えたりする。さらに再校、三校と校正を繰り返すなかで書物としての内容や体裁が整序され、最後の四校で完了する。千ページ前後の本の場合、数か月間にわたってその作業が続く。本文以外に序文、凡例、目次、あるいは解説や索引等を掲載することもあり、最終ページの奥付までの全てが校了してようやく編集者の手から離れる。後は印刷、製本されて納本となる。

「本を上梓することは、母が子を産むようなものだと言われるんですよ。『大子町史』を担当した精興社の中村勉さんの言葉である。本造りには確かに産みの苦しみがある。そして喜びもある。構想から調査、研究、執筆、さらに入稿、校正、印刷、製本まで長い間の苦労がある。だからこそ、発行にまで漕ぎ着けた時の喜びは一入なのである。」

ところで、「印刷文字の製造がコンピュータ化される状況の中で、精興社は平成五年（一九九三）夏、活版印刷の操業を中止」（前掲日本経済新聞）するに至った。活版印刷の工程は、母型、活字等の鑄造、文選、植字、校正、紙型・鉛版、印刷という順に並び、それぞれ技術を持った職人によって作業が行われる。こうした職人による手仕事は、効率の面から、また経営の面からも続けることが難しくなってきたのである。現在でも活版の手触りの良さや活字のきめ細かさに魅入られ、活版印刷を望む出版社は後を絶たないという。本当に残念なことである。そう言えば、最終巻となる『大子町史 通史編 下巻』の発行は平成五年三月であるから、奇しくも活版による印刷の終了間際ということになる。（井上和司）

拓本を通してみた文化財の魅力

大子町大字栃原に、町指定有形民俗文化財に指定されている道祖神碑がある。栃原と上岡を結ぶ広域農道アップルライン栃原入口付近の沢沿いの古道にひっそりとたたずんでいる。

道祖神碑は、高さ八五センチメートル、幅五〇センチメートルで、硬い砂岩系の自然石でできています。石碑には、中央に「道祖神」と深く刻まれ、両手両足で方向を示す僧侶の姿が浅く彫られている。また、僧侶の示す行き先は、右上に「是より うわさわ だいご」、右下に「やま道」、左下に「是より」とちはら たかぶ」、左下に「是より おふさわ」と刻まれている。

造立年代の記載は無く、伝承では、建暦二年（一一二二）親鸞聖人が巡錫の砌、道に一夜をあかし、後難を避けるために原面を描いて立ち去ったものを地元の民が彫刻し建碑したと伝わる。町内にみられる道標のうち建立年代がわかるものは江戸時代中期以降のものであることから、この道祖神も同時期のものと推測される。

今年の五月、日立市郷土博物館の綿引逸雄さんに同行し、この道祖神碑の拓本採取を行ったので紹介したい。

私自身、拓本を採るのは初めてで、綿引さんに指導を受けながら作業を進めた。

まず、石碑についていた苔や土などの汚れを取り、水を霧吹きで吹きかけ、水を含むとよく伸びる性質の和紙を使用し、石碑に和紙を張り付けていく。張り付けた和紙の上からさらに霧吹きで水をかけ、空気が入らないように、また破けないように気を付けながら時にブラシで叩くなどして、石碑と和紙を密着させる。その後、和紙が半濁きになるまでしばらく待ち、半濁きになったところで、綿を絹布で包んだ「たんぼ」というものに松の煤で作った墨を薄く付け、和紙の上から優しく叩きながら墨を載せていく。石碑に刻まれた文

字を白く浮かび上がらせるために、文字の周りを慎重かつ大胆に、少しづつ墨を載せ、白と黒のコントラストをはっきりさせていく。時々、少し離れて全体のバランスを見ながら作業を進めた。

乾ききる前に一気に墨を載せるのだが、立っている道祖神の拓本は中腰になりながら作業するので、思っていたより体力がいる。また、石碑は自然石に掘られているから石の形によつて、でこぼこしているため、和紙を張り付けるにも、墨を載せるにもコツがいる。そして浅く彫られている文字を消さずに、はつきり浮かび上がらせるのもまた難しかった。

今回正しい拓本の採り方を教えていただき、文化財を傷つけることなく拓本を取ることができたので、今後の資料の一つとして活用していきたいと思う。



拓本写真

拓本を採ることで写真や横写では分からない石碑に刻まれた文字の形や線の太さ、刻まれた深さ、そして、自然石に掘った技術や先人たちの思いを読み取ることができた。8
拓本を通して、またこの文化財の魅力に気づくことができた。この機会を与えてくれた綿引さんに感謝し、大子町にある他の石碑などの拓本に是非チャレンジしてみようと思う。

(家田望)

編集 大子町歴史資料調査研究会

編集人 齋藤 典生 (大子町歴史資料調査研究員)

井上 和司 (大子町歴史資料調査研究員)

家田 望 (大子町教育委員会)

発行 大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六九番地
大子町立中央公民館 ☎0295(72) 1148